

序文

原始キリスト教とラビ・ユダヤ教

アダ・タガー・コヘン

CISMOR の一神教学際的研究の枠組みの中で、長きにわたる、時に痛ましいキリスト教徒とユダヤ教徒の関係の中の重要なテーマを、共同して探究することができるようになった。本年のユダヤ学会議のテーマとして、古代・中世初期におけるユダヤ教とキリスト教の関係が選ばれた。本巻に収録された論文から明らかになるように、紀元後の最初の千年は、それぞれの宗教の支持者がそれぞれのアイデンティティーを確立するために、絶えず二つの宗教の間に葛藤があった。儀礼的、神学的な問題が、論争の核にあり、様々な物語がユダヤ教にもキリスト教にも見られる。

ボストン大学のパウラ・フレッドリクセン名誉教授が、最近出版されたユダヤ教と新約聖書についての三冊を書評で取り上げている。フレッドリクセン氏は次のようなコメントで始めている。「新約聖書に内在するユダヤ性と、イエスとパウロという主要な人物のユダヤ性は、長く曖昧にされてきた。それは、二つの関連する歴史現象が同時発生したためである。一つは、異邦のキリスト教の誕生であり、もう一つは、ラビ・ユダヤ教の誕生である」。キリスト教の発展に伴い、キリスト教は「史的イエスをキリスト教教義から区別しようとした。そして、19世紀、20世紀になって始めて、研究者は「史的イエス」を求めて時代を遡るようになった」。そして、彼女は指摘する。「特に1950年代以降、問いかけが、神学部から人文学の比較宗教学科に移行するにつれて、様々な信仰、あるいは無信仰の研究者が、研究に共同参入するようになった。現在の研究動向では、宗教学部はもちろん神学部でも、ユダヤ教徒が、キリスト教史、特に、古代キリスト教史の研究者であることは決して珍しいことではない」¹⁾。

同志社大学神学部と CISMOR 研究センターは、上記の状況の一環であり、このグローバルな議論に参画している。

本年度の会議は、二人の著名な海外の研究者—古代キリスト教・ユダヤ教研究の第一人者である、イスラエル・オープン大学、オーラ・リモール教授とアメリカのイエール大学、ペーター・シェーファー教授を招待して2日間にわたり開催された。また2日間、学生のためのワークショップも開かれた。上記二人の研究者は、公開講演の他、研究会にも参加された。研究会では、市川裕教授（東京大学）、浅野淳博教授（関西学院大学）、越後屋朗教授、石川立教授、村山盛葦准教授、前川裕囑託講師（以上同志社大

学)が参加され、研究発表、コメントがなされ、有意義な会となった。

会議では、海外研究者の到着日程の関係もあり、キリスト教とユダヤ教の歴史的発展の時系列に沿って発表されたわけではない。しかし、本巻にまとめるにあたっては、時系列に沿って、初期キリスト教から中世ユダヤ教へと論文を配置した。以下、主要論文の概論である(それぞれのコメントも参照のこと)。

ペーター・シェーファー教授の論文は、紀元後1世紀のキリスト教拡大期という非常に繊細な時期に関係している。ラビたちが、「唯一の神についての確固たる信仰の境界を広げ、曖昧にしようとする」ユダヤ教徒を同定するために用いた、ヘブライ語の「異端」を意味する「ミーニーム」という単語を取り上げた上で、シェーファー氏は、ラビたちのアイデンティティーの確立は、ユダヤ教の外のセクトやグループと論争するだけではなかったと論じる。ラビたちの主要な敵対者は、必ずしも「異教」やキリスト教ではなかった。むしろ、ラビたちが対抗して格闘した考えに取り憑かれた同僚であった。「外部」と「内部」の境界は不鮮明であった。更に、ダビデ、メタトロンの像についてのラビ文献の資料を解釈し、彼らが神に対してこれらの2人をいかに扱っているかの解釈を通して、初期キリスト教時代のユダヤ教にも、神の周りに、準神的な存在がいかに見出されるかを示している。研究会では、ラビたちが当時のキリスト教に対して見せた態度の一環として、タルムードがいかにイエスの像を関係づけたかについて、シェーファー氏は論じた。シェーファー氏が強調するのは、タルムードは、イエスを歴史的人物としては扱っていない、そして、バビロニア・タルムードとパレスティナ・タルムードでのイエスの語り方には大きな違いがあるということである。論考の最後では、バビロニア・タルムードは「キリスト教徒が主張する新しい契約に対してユダヤ教の勝利を高らかに宣言している」ことに関して、これを彼は「ユダヤ教徒とキリスト教徒が居住したササン朝ペルシア帝国下で、ユダヤ教徒ではなくキリスト教徒が迫害される少数派だったという非常に特殊な状況下に生じた、ユダヤ教史における唯一の出来事である」とする興味深い指摘をしている。

浅野淳博教授による『使徒教父文書』に見るユダヤ教からの教会分離：プロレゴメノン」では、キリスト教徒が、絶えずラビのユダヤ社会と比較しながら、キリスト教徒のアイデンティティーを分離確立することを求めた社会的コンテクストが紹介される。浅野氏は、キリスト教徒が、ユダヤ教における本質的で中心的な宗教概念の問題に真っ向から取り組み、新しく異なる解釈をそれらに適用していく道筋を扱っている。「契約」「トーラーの受容とキリスト教世界におけるその地位」、「ユダヤ教のエルサレム神殿」といった問題を検証する。氏は、使徒教父文書研究を基にして、キリスト教が次第にユダヤ教から分離していくプロセスを示している。バルナバの手紙と聖イグナティウス文

序文

書を「紀元後2世紀の初期の分離現象を観察するために用いている」。これらの文書は、アイデンティティー構築時代の証言である。

前川裕氏は、福音書におけるユダヤ教への言及について「歴史か物語か」という重大な発題をされた。前川氏は、構造／様式、修辞法、状況、登場人物、プロット、という基準を有する物語分析手法を用いる。マルコ、マタイ、ルカ、ヨハネ福音書でのユダヤ教徒への言及を通して、前川氏は、それぞれの福音書での言及は、物語か、単なる伝承か、何か歴史的な事実を含んでいるのかを確立しようとする。ユダヤ教徒が連続して言及されるそれぞれのテキストで、彼らの表示のイデオロギー、心理的な側面を求めようとしている。氏の論考から、歴史的事実のリアリティを指摘できる場合がある一方で、殆どの場合、彼によれば、伝説、物語的であるという複雑な状況が明らかにされる。

オーラ・リモール教授の論考では、中世初期のヨーロッパのユダヤ教徒とキリスト教との関係に、舞台は転じる。リモール氏の論考は、キリスト教とユダヤ教の関係、あるいは、彼女の指摘によれば、家族関係にあるエクレスシアとシナゴーガの対話から始まる。キリスト教とユダヤ教のこれらの関係の家族的なイメージは、聖書の登場人物、とくにヤコブとエサウに投影される。これらの関係は、弱い方（ユダヤ教徒）と、もう一方の勝利者である契約の相続者（キリスト教徒）を表現している。「イエスの時代に生きていたユダヤ教徒の全て、そしてその後の世代に生きる全てのユダヤ教徒に、彼の十字架の罪がある」。それゆえに、彼らの土地を追放される罰を与えられた。こうした考えと確信がヨーロッパ文化の中に何世紀にもわたって留まり、時にユダヤ教徒迫害が発生する原因になった。この時代、ヨーロッパでは「キリスト教徒とユダヤ教徒との間の論駁文学」ジャンルが発展する。キリスト教徒が書いたものは彼らが「勝利」し、ユダヤ教徒が書いたものは彼らが優れていることに紙幅が割かれる。リモール氏の記述では、ユダヤ教徒がキリスト教共同体から分離するのは、12世紀から15世紀であり、その時期にユダヤ教徒に対するより激しい嫌悪が表現された。

研究会でリモール氏は、ユダヤ教徒のマリア「神の母」に対する態度に焦点を当てた。それは、特にユダヤ教徒による13世紀の反キリスト教文学書である『古への勝利』(*Nizzahon Vetus*) や、より後代の書「イエス史」(*Sefer Toledot Yeshu*) と題された書物に集約されている。リモール氏は、これらのユダヤ教徒による軽蔑的な物語が、キリスト教世界でどのような反応を受けたかを、パレスティナとコンスタンティノープルで作られた民話的なキリスト教の3つの物語を提示しながら示している。

2日間の会議の補完として、大学院生のセミナーで2日間のワークショップが開催された。ペーター・シェーファー教授もオーラ・リモール教授も、ワークショップでそれぞれの講演を展開された。シェーファー氏は、ダビデを扱うラビ文献についてのテキス

ト研究をされ、リモール氏は、1263年のバルセロナ公会議のテキスト証言を論じた。

この会議でのキリスト教とユダヤ教が形成される時代の研究を通して、過去に共通の根を有し、別個の信仰や儀礼の中核を作り出して二千年にわたって共存し、かつ、競合するこれらの二つの宗教の間の錯綜する関係の一面を見ることができたのではないだろうか。

注

- 1) Paula Fredriksen, “What a Friend We Have in Jesus”, *Jewish Review of Books* 9 (spring 2012) <http://www.jewishreviewofbooks.com/publications/detail/what-a-friend-we-have-in-jesus>; フレッドリクセンが書評した新約聖書についての三冊は、すべてユダヤ人によって執筆されている。キリスト教のテキストがユダヤ教徒にとって決して未知のものではないということを示そうとしている学術研究である。